広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	訳詩ノート３　フィヴィ・ヤニシ　詩集『ホメロス風詩集』より詩三編
Author(s)	佐藤，りえこ
Citation	プロピレア , 25 : 51 - 60
Issue Date	2019-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048243
Right	Copyright (c) 2019 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

研究ノート

訳詩ノート３

フィヴィ・ヤニシ

詩集『ホメロス風詩集』より詩三編

佐藤　りえこ

1. 詩人フィヴィ・ヤニシ Φοίβη Γιννίση について

フィヴィ・ヤニシ（1964 年ー）はアテネ国立技術大学で建築学を学びリヨン大学で博士号を取得、現在はテッサリア大学で建築デザイン、美術史、文化人類学などを教えるかたわら精力的に作品を発表する異色の詩人です。1980 年代には文芸雑誌「Μαύρο Μουσείο」を拠点に「Ποιητική」や「Ποίηση」、「ΦΡΜΚ（φάρμακον）」などの雑誌にも詩を投稿してきました。2000 年に入ってからはインターネット上の投稿サイト「e-poema.eu」や「poeticanet.gr」に作品だけでなく評論や翻訳も発表しています。発表の形式は文字によるだけでなく特定の空間に自作のオブジェを設置しスクリーンに映像を流しながら朗読や踊りをおこなうインスタレーションの手法を取り入れた多彩な創作活動を展開しています。環境学に携わる建築家と実践的なパフォーマンスをとおして都市景観を表現、創造する芸術家のグループ Αστικό Κενό（Urban Void）の活動に出展したり 2007 年に始まったアテネ・ビエンナーレに参加したりし、その展示作品や映像、音声の一部は youtube で鑑賞することができます。

ヤニシの詩には古代ギリシャの世界が描かれています。とくに第一詩集『環 *Θηλιές*』（2005 年）に続く現代版『オデュッセイア』と評される第二詩集『ホメロス風詩集 *Ομηρικά*』（2009 年）はドイツ語や英語に翻訳され欧米の読者を魅了しました。2012 年に出版された第三詩集『蝉 *Τέττιξ*』はインスタレーションで朗読した詩の手書き原稿が一作品ごとに見開き一ページにまとめて印刷されている一風変わった詩集です。このほか近年では第四詩集『ラプソディー*Ραψωδία*』（2016 年）、第五詩集『キマイラ *Χίμαιρα*』（2019 年）が出版されています。

2. 第二詩集『ホメロス風詩集 *Ομηρικά*』（2009 年）[1)]について

ヤニシの第二詩集は題名が示すようにホメロスの『オデュッセイア』に登場する人物や場所を素材にした作品が収録されています。これら主役級のモチーフはホメロスの世界を再現するためではなく、脇役の小石、波、草、蝉など身の回りにあるごくありふれた素材とともに現代に潜在的にあるいは顕在的に存在するホメロス的な世界を描出するためにヤニシが選んだものです。ホメロス的なモチーフはビーズに糸を通し一粒ずつ繋げていくように、ホメロスの描く世界、ホメロスに着想を得た作品、そして現代とをつないでいく役割を担っています。

ヤニシは詩の長さに関係なく基本的にコンマもピリオドも用いません。また固有名詞や特定の語を除いてすべて小文字で書き始めます。題名に（）がつけられることが多く同じ題名には通し番号（ローマ数字）が添えられています。書き方だけでなくインスタレーションによる作品の発表をおこなうヤニシならではのこだわりもあります。詩は黙って読まれるものではなく声に出して読まれるものであり、そのためには規範的な語法からまずことばを解放し意味と音声の新しい融合を見い出そうとする試みがこの詩集にも見られます。

今回は『ホメロス風詩集』から「（イタケⅠ）*(Ιθάκη Ι)*」「（ペネロペーI am addicted to you）*(Πηνελόπη*-I am addicted to you*)*」「（ロトパゴスたちⅡ）*(Λωτοφάγοι Ιι)*」の三編を訳してみましょう。

3. 翻訳のポイントと試訳

3.1「（イタケⅠ）*(Ιθάκη Ι)*」

ホメロスの『オデュッセイア』でイタケはトロイアに向けて出港したオデュッセウスの故郷で、トロイア戦争が終結したあと十年にわたる漂流の旅を終えて戻っていった場所です。そのイタケへ向かうオデュッセウスを髣髴とさせるような外国人を見送るための晩餐会の場面から詩は始まります。客人たちのテーブルにはワイン、何か頭に巻きつけた人が見えます。詩の語り手（一人称）はその相手である客人（二人称、頭に何かを巻きつけた外国人）の話に涙します。後半、客人が船に乗り込んでから客人の人称が三人称に変わります。このように登場人物と語り手の人称が詩の途中で変化するのはヤニシによく見られる特徴です。三行目から見てみましょう（下線部は佐藤による）。

<u>κεφάλι</u> τυλιγμένο-
με δάκρυα ακούω το τραγούδι

ακούω να φεύγεις να γίνεσαι ξένος
εμπρός στην τηλεόραση <u>όνειρο</u>
η γλώσσα σου δεν μου ανήκει
ιστρόντας το <u>στόμα</u> ανοίγοντας
ο ξένος θέλει να επιστραφεί
σενδούκια δώρα φορτωμένος

B.スネーデンは下線部を含む行を次のように訳しています（斜字体は佐藤による）。

your head shrouded-
a dream *I had* in front of the TV
telling the story opening *your* mouth

英訳では「夢 dream」は語り手が見たもの、「頭 head」と「口 mouth」は相手「（外国人＝客人）のものであることが人称代名詞により明示されます。また現在分詞「物語る telling」と「開く opening」も相手の行為であることがわかります。「晩餐の席で客人が口を切って語り始めた話に私が涙を流す」場面の人間関係は英訳の方がより明確です。途中の「私が見た夢 a dream *I had*」の一行は原詩では「テレビの前で夢 εμπρός στην τηλεόραση όνειρο」となっていて誰がいつ夢を見たのかは描かれていません。それよりも原詩で重要なのは「夢」が「晩餐の席で語られる話」の本質を表しているということです。「あなたはここを去り外国人になると聞く ακούω να φεύγεις να γίνεσαι ξένος」、「あなたのことばはわたしと違う η γλώσσα σου δεν μου ανήκει」の二行から「外国語の相手の話」は「テレビの前でいつの間にか眠っていたときの夢」のように不鮮明な像、断片的にしか理解できない内容の話であることがわかります。

後半「眠りの小舟 η βάρκα Ύπνος」が砂浜に泊まったあと、客人（三人称）は「洞窟 η σπηλιά」に入り静かにシーツの間に体を横たえます。この場面で「洞窟が…（中略）…黙ったままの彼を受け入れる και η σπηλιά /…/ βουβό θα τον δεχθεί 」とあるように「洞窟」は擬人化され客人を迎え入れる者になっています。蛇足ですが作品の後半はホメロスの『オデュッセイア』でカリュプソやキルケが登場するエピソードを読者は思い起こすことでしょう。

試訳：

（イタケⅠ）

長い食卓のむこうに
－見知らぬ客人たち　葡萄酒
頭に頭巾－
涙ながらに聞くその詩(はなし)
あなたはここを去り異国の人になると聞く
画面(テレビ)のまえで　夢うつつ
あなたのことばは　わたしと違う
口をひらいて物語る
その異国の者は帰郷を願う
腕には抱えきれない贈り物
今夜のように　目を覆われて
仲間は漕ぐだろう
眠り(ヒュプノス)の小舟は
石になるまえに　砂浜に
泊まるだろう
湧き水に
蜜蜂の壺
童女(こども)の遊び
そして洞窟は
二つの扉
「栄誉」と「忘却」があり
彼を静かに迎えてくれるだろう
シーツにくるんで
静寂のなかに

3.2「(ペネロペーI am addicted to you）*(Πηνελόπη*-I am addicted to you*)*」

ホメロスの『オデュッセイア』ではペネロペは夫オデュッセウスの留守に再婚を迫る求婚者から身を守るため一計をめぐらせます。織物ができあればそのとき求婚者のなかから夫となる者を決めるという偽りの約束をし、一日じゅう機織りをしては夜にそれをほどき三年あまり求婚者を欺き続けます。ヤニシのペネロペはプールで泳ぎ続けることで自分の身を守ろうとします。プールでの水泳の動作は機を織るとき緯糸をとおす杼の規則的な動きと重ね合わせることができます。

原詩の副題である英語の一文 I am addicted to you は試訳では訳さず英文をそのまま採用しました。また改行は K.ヴァン・ダイクの英訳にならい 31 行に分けられている原詩とは異なる分け方をしてみました。

試訳：

（ペネロペーI am addicted to you）

彼女は熱心にプールに通い毎日プールで何往復も
同じ距離を行ったり来たりプールのおかげで調子がいい
泳ぐと元気になるから続けて往復(ラップ)を何回も
息つぎ 手(ストローク) と足(キック)は規則的に
頭にあわせてイン　アウト　イン　アウト
顔が水から出る　入る　出る　入る
吸って　吐いて　吸って　吐いて
すこしレーンでひと休み水面すれすれのタイル
光に浮かぶ奇怪な肉体キャップのせいかフィンのせい
水には塩素たっぷり糸杉の向こうには空
私はプールに生かされている
歌(カウント)は終わらない「キック 19」イチ　ニ　サン　シ　ゴ
ロク　シチ　ハチ　ク　ジュウゴ　ジュウキュウ　ターン
歌(カウント)はエンドレス
プールで数えていると報われる私
考えなくていいのだから
私あの人に愛されていないと

夫が戻るまで機を織り続けるホメロスのペネロペとプールで泳ぎ続ける現代のペネロペは同じでしょうか。『オデュッセイア』では夫は帰還し傍若無人な求婚者に報復し夫婦は元の生活に戻ります。ヤニシが描くペネロペはどうでしょうか。この作品でも語りの視点は詩の途中で変わります。前半、三人称（「彼女」）で語られるペネロペは詩の終盤で一人称に変わり隠れていた心の内を吐き出します。現代のオデュッセウスはペネロペのもとにまだ戻っていません。確かなことは妻への夫の愛情は失せていて、たとえ夫が帰って来ても二人の関係は夫婦ではないということです。夫の愛を確信していれば機織りに費やされる時間

はある目的を達成するための有意義な時間となります。これに対して夫婦の関係が破綻する未来しかない現代のペネロペにとってプールで泳ぎ続けることは夫との再会のときまでの消極的な時間の浪費でしかありません。さっさと裏切った夫を見限り新しい将来のために何か行動を起こすべきかもしれませんが、ペネロペは毎日、プールで泳ぐことで現実から逃避しようとしています。二人のペネロペの差異をここに見ることができると思います。ヤニシのペネロペは、夫の心変わりという事実が受け入れられず夫に捨てられる不安が募るあまり自分を守るために水泳に逃避していると言えるでしょう。

最後の行に出てくる「あの人」を夫オデュッセウスではなく EU に置き換えてみると別の解釈が可能になります。この作品が最初の「ギリシャ危機」よりも前に発表されていることから E.ピリプは、膨大な財政赤字を抱え込むギリシャに対して全世界的に不信感が強まるなか迫りつつある経済危機を回避、打開する政策が見いだせない閉塞的な状況に陥ったギリシャこそがまさに現代のペネロペであると指摘しています [2)]。ギリシャ国民は EU からの経済援助に望みを託し財政を健全化する政策を政府が打ち出すまでのあいだ、不安な「今」をやり過ごさなければなりませんでした。いったいこの不安から身を守るためにギリシャ人たちは日常をどのように過ごしたのでしょうか。ヴァン・ダイクはこの時期に詩の発表形態が大きく革新し従来とは異なる手法や場所で詩が大量に生産され発表されたと述べています [3)]。インターネット、書店やカフェ、街角や閉店した店のシャッターなど作品が生まれ発信される場所は、まさに作品の作り手である現代のペネロペにとっての「プール」であるように思えてなりません。

3.3「(ロトパゴスたちⅡ) *(Λωτοφάγοι II)*」

最後に取り上げる「(ロトパゴスたちⅡ)」は先の「(ペネロペーI am addicted to you)」とともにヴァン・ダイクが編集した訳詩選集『新ギリシャ詩：緊急財政政策 *Austerity Measures : The New Greek Poetry* 』(2016 年) に収録されています。2010 年と 2015 年に起こったいわゆる「ギリシャ危機」をテーマにした作品を集めたこの選集にロトパゴスを素材にした作品が三編、入っています。ヤニシの作品とインターネット上の投稿サイト *Τεφλόν*(2009 年－)の共同主宰である Kyoko Kishida (1983 年－) [4)] と J.カリード (1979 年－) の詩です。

これらの作品はホメロスの『オデュッセイア』第九書に歌われている「蓮の実喰い」のエピソードをもとにしています。イタケへの帰路、オデュッセウス

と部下たちはマレイア岬を回ろうとして北風に押しやられ九日間も大海原を漂い十日目に「蓮の実喰いの国」に上陸します。そこで勧められるまま蓮の実を食べた部下たちは

部下のうちで、この蓮の、蜜みたように甘い果実(このみ)を啖(くら)った者は、/ みなもう帰ろうとも、報告をしに戻ろうとも思わなくなり、/　ただ ひたすら、そのまま蓮の実喰いの族(やから)といっしょに実を貪(むさぼ)って、/ 居 続けばかりを乞い願い、帰国のことなど念頭にない有様(を見て) [5)]

やむなくオデュッセウスは帰りたくないと泣き叫ぶ部下たちを引きずって船へと連れ戻し逃げ出さないように漕ぎ座の下に縛りつけ、別の部下に早々に船を漕ぎだすよう命じます。

ヤニシの詩では「薬 το φάρμακο」(＝ロトスの実) を食べてしまった「私」が読者に「私はここに残ろう」と告げます。「ここ」は海岸や山、川といったギリシャの平凡な景色が広がる所で、「お前」が居る場所でもあります。

この作品も登場人物の人称について考えてみましょう。「お前」は、もちろんこの作品の読者である私たちのことではなく、「私」より先に「薬」を喰らい「ここ」から離れなくなった先輩のような存在、「薬」を飲んだ「私」は「お前」の仲間になった新参者で、二人は別々の人物なのでしょうか。登場人物の人称を自由に変えてしまうヤニシのこと、語りの視点を二度、入れ替えながらも「お前」も「私」も同一人物で、夕暮れの描写は「私」が「薬」を食べたときのかつての自分と対話する場面を表しているのでしょうか。「忘却(レーテー)λήθη」「今　そう今が新しいはじまり το κάθε στιγμή καινούργια αρχή 」から、薬の副作用による記憶力の低下のせいで、過去も現在も、自分も他人もすべてその境界が曖昧になっている「私」は「お前」と同じ人物なのではないかという気がしてなりません。

E.ピリプはこの作品も EU とギリシャとの経済、外交上の関係から詩の主題を読み取ろうとしています。すなわち EU がギリシャに処方した経済的支援が「薬」で一度これを服用すると危機よりも前のかつてのギリシャには戻ることはできず（正確には戻ることを望まなくなり)、国の自立性や矜持を忘れ果て EU の言いなりになるしかないギリシャ人がロトパゴスであると解釈しています [6)]。

試訳：

（ロトパゴスたちⅡ）

私はここに残ろう　道が折れるところ　湾が
曲線を描くところ　岬の先　険しい
山の頂　入り江の懐
川が海に注ぎこむところ
ここに私は残ろう
赤い林檎　熟れた梨　靴底は
擦り減らない
素足で歩くお前　軽やかに装い
夏が終わるが冬は来ない
お前が戸外に腰かける夕暮れどき
鳥が鳴き灯がともる
大きな食卓に晩のつつましい食事
酔った蛾がここそこに
お前は飲んでしまったその薬
薬　ハナ
薬はクスリ
忘却（レーテー）
今　そう今が新しいはじまり
どこから来たのか私はわからないが戻りたくない
薬
ずっと今すぐ　永遠に今すぐに

注

1) Γιαννίση, Φοίβη (2009) *Ομηρικά*, Κέδρος 収録作品のうち「（ペネロペーI am addicted to you）*(Πηνελόπη-I am addicted to you)*」「（ロトパゴスたちⅡ）*(Λωτοφάγοι II)*」の二編は K.ヴァン・ダイク編の訳詩選集『新ギリシャ詩：緊急財政政策 Austerity Measures』（2016 年）』に所収、「（イタケⅠ）*(Ιθάκη I)* 」は雑誌に掲載されてインターネットで公開されている。
“(Πηνελόπη-I am addicted to you)”, “(ΛωτοφάγοιⅡ) ”, Van Dyck, Karen (ed.) (2016),

Austerity Measures : The New Greek Poetry, p.114, p.118, Penguin Books, UK.
"(Ιθάκη Ⅰ)", *Beloit Poetry Journal*, vol.67, No.4(2017), p.44.
英訳は以下を参照。
Van Dyck,K., "(Penelope-Έχω πάθος για σένα)", *Austerity Measures,* p.115.
Matsoukos, Konstantinos, "(Penelope-I am addicted to you)" *Greek Poetry Now!*(2007, May), URL: http://www.greekpoetrynow.com/poet_poems_eng/giannisi_poems.html
Sneeden, Brian, "(Ithaka Ⅰ)", *BPJ*, vol.67, No.4, p.45.
Sakkis, Angelos, "(Lotus Eaters Ⅱ)", *Austerity Measures,* p.119.
Philippou, Eleni, "Perennial Penelope and Lingering LotusEaters : Revaluing Mythologial Figures in the Poetry of the Greek Financial Crisis", *DIBUR LITERARY JOURNA*L issue 5, (2018 Spring), pp.72-86.
2) Philippou, pp.77-78.
3) Van Dyck, xvii-xviii.
4) Kyoko Kishida は女優の岸田今日子に因んだペンネーム（Van Dyck, p.143）。Kishida と「ロトパゴスたち」については 2018 年度日本ギリシア語ギリシア文学会研究発表会（2019 年 2 月 10 日開催）で発表。注の最後に拙訳を掲載。
5) 呉茂一訳ホメーロス『オデュッセイアー（上）』岩波文庫、(1988[20])、p.261 より引用した。() は呉による。
6) Philippou, p.82.

試訳：

ロトパゴスたち

Kyoko Kishida 作

黙(だんま)り決めこみ　それで分かっているなんて
年月が何度めぐったかしれないが　そうすべきじゃなかった
とどめを刺すんだな
少しずつ毒を入れるんだな
おれたちがされてきたみたいに
いつだっておれたちは　見ないふりしてきたけれど
飴玉(あめ)にさ　小石(いし)を混ぜたのは　どいつだ
鴎の羽にさ　鉄床(てっ)を結わえたのは　どいつだ
「禁欲的(ストイックに)」とか　なんでまだ唱えてるんだ

尊重(リスペクト)するって？
どいつをだ？
ロトパゴスたちを？